

演題4 P1-K8 [Poster Session]



パーキンソン病患者の主介護者における 介護負担感について

畑中茉紀氏

医療法人北祐会 北祐会神経内科病院・財団法人 北海道神経難病研究センター

【共同研究者】

加藤恵子氏、本間早苗氏、濱田晋輔氏、森若文雄氏

医療法人北祐会 北祐会神経内科病院・財団法人 北海道神経難病研究センター

パーキンソン病 (PD) 患者の介護では、夜間に介護が必要となる場合もあれば、重症度は高くても寝たきりで活動量が少なく、介護にかかる時間が少ない場合があり、患者の病態によって介護者の負担感は大きく異なる。そのため、PD 患者の介護者にかかる負担感を理解し、いかにして在宅生活の継続をフォローしていくかが重要な課題となる。そこで北祐会神経内科病院の畑中茉紀氏は、PD 患者の介護者を対象に介護負担感についてのアンケート調査を実施し、介護に関する時間的な側面が、介護者の介護負担感にどのような影響を及ぼしているのかを検討した。

直接的な介護量が多いほど、 介護負担感は増大する

本研究の対象は、PD 患者の主介護者 27 名で、その年齢は (平均値 \pm SD) 70.0 ± 8.1 歳であった。介護される PD 患者の背景は、年齢 72.3 ± 6.3 歳、Hoehn & Yahr 重症度分類 1 度 1 例、2 度 3 例、2.5 度 11 例、3 度 6 例、4 度 5 例、5 度 1 例であった。主介護者に対して、J-ZBI (日本語版 Zarit 介護負担尺度) や、介護項目、サービス利用、介護に関する時間などの質問項目から構成されるアンケート調査を実施した。患者情報 (年齢、性別、罹患歴、Hoehn & Yahr 重症度、BI [Barthel Index])、J-ZBI による介護負担感、その他のアンケート結果について Pearson 相関係数を用いて解析を行い、各調査項目間の関連性を検討した。

J-ZBI の合計点とアンケート項目の比較から、介護負担感と介護項目数、介護時間には正の相関が認められたが、その他の項目との関連性はなかった。また、Hoehn & Yahr 重症度は介護時間、介護項目数、罹患歴と有意な正の相関 (すべて $p < 0.01$)、BI は介護時間、介護項目数、罹患歴

と有意な負の相関 (すべて $p < 0.01$) が認められ、夜間起床回数も介護項目数、罹患歴と有意な正の相関が認められた (ともに $p < 0.05$)。J-ZBI 各質問項目の平均スコアの検討より、介護者は「患者の将来に対する不安」や「患者が介護者を頼っている」ことに対して、特に負担を感じている傾向がみられた。この傾向は、介護負担感が「低い」~「やや中等度」の介護者 (J-ZBI 合計点 40 点以下) でも認められた。

介護者に対する身体的な介護負担の 軽減だけでなく、精神面の支援も必要

今回の検討結果から、PD 患者の介護者が感じる介護負担感には介護にかかる時間、介護項目の多さ、BI の低さなど、直接的な介護量が影響することが明らかとなった。特に、PD 罹患歴が長く、重症度が高い患者ほど、介護量は増大していた。一方、介護者の自由時間、睡眠時間と介護負担感には関連性が認められなかった。また、介護負担感があまり強くない段階から介護者は患者の将来に対する不安を抱えていることが示唆された。身体的な介護負担の軽減だけでなく、進行性の病態に対する理解や、不安に対する精神面の支援が重要だと考えられる。

今回の検討では、介護者の介護に関する時間の捉え方に個人差があったため、今後は時間に関する定義を明確にし、聞き取り調査を実施していく必要がある。さらに、精神的な負担感に関わる要素として認知症や高次脳機能障害、幻覚などのコミュニケーション面の影響も考慮する必要性がある。加えて、介護者が医療者側に何を求めているかを調査し、より具体的な支援方法を検討していく必要があると考えられた。